

アクティブラーニング事例集を紹介します。興味のある事例を、末尾にあるサイトから検索してみてください。

(教育学術新聞 2515 号 (平成25年2月27日付) 掲載)

26 大学一覧

朝日大学 グループでのインタビューを通じた「読む・書く・聞く・話す」能力の向上

足利工業大学 少人数のグループ間の討論や共同作業

植草学園大学 作品制作を中心とした実技演習

大阪経済法科大学 ICTを活用した協働学習

沖縄国際大学 「良き聞き手」としての評価も行うスピーチ指導

鎌倉女子大学 eポートフォリオを利用した学習やグループ検討、ロールプレイ等

関西国際大学 学生を共同体としたラーニングコミュニティの形成

関西福祉科学大学 共同作業、集団討論、ロールプレイ等演習形式中心の授業

京都薬科大学 議論・プロダクト作成・提示・意見交換会を通して優秀賞選出

金城学院大学 金城学院大学薬学部部屋瓦方式 PBLT

淑徳大学 地域社会と連携したサービスラーニング等

女子栄養大学 ステップ・バイ・ステップで提示するオンライン並びに書籍教材

椋山女学園大学 4泊5日の合宿形式集中講義

鈴鹿医療科学大学 実証例を使用した PBL 方式による自己学習教育

千葉工業大学 継続的なグループ学習を取り入れた授業

中京学院大学 データ処理を通じた問題発見方法の学習

筑波学院大学 大学版「調べ学習」と「体験学習」

常磐会学園大学 グループ討論・ロールプレイ等を通じた参加体験型の学び

常葉学園大学 インタビューを軸にした協働学習

函館大学 実地の問題を通じた体験を重視する授業

福岡工業大学 会社の新人研修やインターンシップを疑似体験できる PBL

文化学園大学 学内外の講師による異文化交流オムニバス授業

北海道薬科大学 Team Based Learningを導入した計算演習

松本大学 具体的な事実から遡って、理論的な枠組みに迫る「帰納的な教育手法」

名城大学 学生参加型授業、課題解決型学習

明治薬科大学 調べ、まとめ、発表を通じたプレゼンテーション

@@@@@

詳しい報告は、以下のサイトにあります

<https://www.shidaikyo.or.jp/apuji/activity/pdf/1stPlan.pdf>

ALwgでは、現在、2つのプロジェクトを計画しています。

1) 「私のミニAL」の執筆

ALは、実はそれぞれの先生方がそれなりに工夫をやってきているはずとの認識があります。

それでは、どんなことをやってきたかについて体験ベースで紹介していただき、AL授業方法の共有化をはかり、学内のAL活動を活発にしていきたいとの思いでお願いするものです。

すでに、全員メールでお願い済みです。

12月18日の締切です

2) ALの実態調査と意識調査

どんな授業でどれくらいどんなALを実施しているかについてのアンケート調査を実施したいと思っています。北海道大学での調査をお借りして実施することで、本学との比較を試みたいと思っています。

近日中に教務課を通してお願いすることになるかと思いますので、ご協力ください。

AL 関連の書籍の回覧をしています。回覧状況はいかがでしょう？

急ぐ必要はまったくありませんので、ゆっくりとお読みいただき、実践につなげていただければと思います。

○手元においておきたい本がありましたら、八千代、岡本課長にメールで請求してください。

○こんな本は参考になるというようなものも、どしどし、お寄せください。

○さらに、各大学で行われている「AL のための学習環境づくり」の本を新たに回覧に回しましたので、お読みください。

○「私とミニ AL」原稿締切は、12 月 18 日まで、企画・IR 室までです。執筆、よろしくをお願いします。なお、電子化して冊子として公開予定ですので、お含みおき下さい。

ユーチューブでとても参考になる講演動画を見つけましたので、紹介します。

- 1) 松下佳代「アクティブラーニングで深い学びのための仕組み」
- 2) 溝上慎一「京都大学の心理学の授業におけるピア・インストラクションの実践」

いずれの方も、「京都大学高等教育研究開発推進センター」*所属の教員です。回覧中の書籍のどれかの編集者・執筆者でもあります。

なお、これ以外にも、アクティブラーニングで検索すると、結構、いろいろの動画があります。役立ちそうなものを見つけたら、教えてください。

*本センターは、大学教授法研究分野、大学教育評価システム研究分野、大学教育課程研究分野、教養教育改善研究分野から構成されています。これによって、教養教育をはじめとする教育の改善や研究へのニーズに、よりいっそう確実に応えることのできる体制となっています。また、特別教育研究プロジェクト「大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成」を主として担当する特定教員も構成メンバーとなっています。

「私のミニ AL」原稿の募集の締切が近づいてきました。

12月18日までに「企画・IR 室」（内田 y-uchida@tokyoseitoku.ac.jp）までメールでお届けください。

原稿のサンプルはすでに2件、皆様に送付済みですが、さらにあらたに石崎教授の了解を得て、サンプルとして添付しました。参考にしてください。

@@@@@@@@

「わかる - やってみる - できる」のサイクルを目指して

応用心理学部 健康・スポーツ心理学科 石崎一記

「グループアプローチ」受講生 44 名

健康スポーツ心理学科・臨床心理学科

1) カウンセリングにおけるグループアプローチについての授業である。

グループアプローチについて体験的に理解することを目的に、理解すること（わかる）、体験すること（やってみる）、実践すること（できる）を目指している。

2) 授業方法の概要

ガイダンスの際にグループ作りを行い、担当回、テーマの割り振りを行う。参考文献を示し、グループごとに検討を進め、授業外の時間（オフィスアワー）に原案を示し、指導を受ける。

第2回目から6回目までは、教員がリーダー（ファシリテーター）を担当して、受講学生は参加者として、グループアプローチを体験する。

第7回目から第15回目までは、各グループが実践計画をたて、リーダーを分担して実践する。

90分のうち、導入、エクササイズ、全体シェアリングで60分を担当した後、次の回の担当者が司会となって、振り返りのためのカンファランス（30分）を行う。その後、出席者全員が振り返りシートに記入をしてそれを担当したグループに渡す。

担当したグループは、それを受け取って、グループ内での反省会を行い、レポートを作成する。レポートは、実践計画書、打ち合わせの記録、全員の振り返りシート、グループ反省会の記録を、表紙をつけて綴じたものを担当日から2週間後までに提出する。

3) その他

授業を構造化することで、学生は内容について神経を集中させることができる。当日、全員がなんらかの役割を担当することをルール化することで、全員の参加がある程度は保障されている。

授業の直接的なねらいではないが副次的に、(1)14週にわたってグループアプローチを体験することで、受講学生自身の人格的成長がみられること、(2)グループでの話し合いの過程で、コミュニケーションや対人関係のトレーニングの機会になっていること、(3)長期にわたる継続的取り組みを求められることで、達成の満足感と自信が得られていることが伺える。しかし、これらについてのエビデンスはないので、検討することは今後の課題である。